

有漏・無漏 [法] ということ

飯 岡 祐 保

1. 無漏 [法] の定義

無漏というのは、『俱舍論』の中で重要な dharma である。なぜならアビダルマの定義として「無漏の心身の五構成要素の束（五蘊。Akḥh.p.2⁴⁵）」と言われているからである。それは、有漏と対になっている。

samskṛtā mārgavarjitāḥ / sāsravāḥ // I-4bc // (Akḥh.p.3⁸⁻⁹)

「道の真理の教え」以外の有為 [法] は、有漏 [法] である。

ここでなぜ「道の真理の教え」が出てくるのかと言え、無漏の定義と関係があるからである。

anāsravā mārgasatyam trividham cāpy asamskṛtam // I-5a // (Akḥh.p.3¹⁵)

三無為（虚空・択滅・非択滅）[法] と「四真理の教え」の内、「道の真理の教え」とで無漏 [法] である。

これは、『アビダルマディーパ』でも同じである。

[19a] sāsravāṇā (na) sravā antyās trayāḥ (ADV.p.18³)

有漏は [苦集諦] であり、無漏は、最後の [道諦と] 三種の [無為] である。（『デ研』p.270）

2. 定義の問題点

無漏には、三無為が含まれる。それ以外の「道の真理の教え」については、「四真理の教え」の一つであるから、それだけを取り出せず、順序どおりでなければ意味がないと釘を刺されている。

duḥkham samudayas tathā / nirodhamārga iti // 6-2bc //

esa eṣām anukramaḥ / (Akḥh.p.327¹⁵⁻¹⁷)

苦しみの [真理の教え]、その原因の [真理の教え] そのように [苦しみを] 無くす [真理の教え]、その方法（道）の [真理の教え] ということとそのことは、その順序に従う。

しかし、ADV では「道の真理の教え」が上である。

atas tñ eva mārḡapradarśaṇa[na]karmaṇābhipretā[n] / (ADV.p.2¹⁵)

それ故、〔これら人天達に〕道を説くという目的によって〔四聖諦を説くことを〕意図している。（『デ研』 p.242）

mārgasatyam ekaparakāram . . . triprakāram śīlasamādhīprajñāskandhabhedāt catuṣprakāram vā prayogāmārgādibhedāt / (ADV.p.2⁹⁻¹¹)

道諦は一種である。…あるいは三種である。戒・定・慧蘊の相違からである。あるいは四種である。加行道（無間、解脱、勝進の各道）等の相違からである。（『デ研』 p.241）

『俱舍論』の扱いと、ADVの扱いを検討してみよう。

yatra hi sakto yena ca bādhyate yataś ca mokṣam prārthyate tad evādaḥ vyavacāranāv arthyām duḥkhasatyam parikṣyate / (Akbh.p.328⁵⁻⁶)

〔kleśa に〕染まって、そこからの解脱を望み、初めに細かく観察する位が、苦しみの真理の教えとみられる。

atra phalabhūtā upādānaskandhā duḥkhasatyam / hetubhūtāḥ samudayasatyam / . . . ata eva tayoh phalahetubhāvān nāmato bhedo na dravyataḥ / nirodhamārgayos tu dravyato 'pi / (Akbh.p.328¹²⁻¹⁵)

苦しみの〔真理の教え〕は、果としてある〔kleśa を〕材料とする心身の構成要素の束である。〔kleśa を〕材料とする心身の構成要素の束が原因の存在で、その原因の真理の教えである。…だからこそ、そのような原因と結果の存在がある。名に差があり、実体としてではない。〔苦しみを〕滅する真理の教えと〔苦しみを滅する〕方法の真理の教えとは、しかしながら実体としてでもある。

ADV では、

tatra duḥkhasatyam ekavidham abhinirvṛttisvābhāvīyāt / . . . jātyādyā . . . vā pañcop[ādānaskandhāḥ] / athavā paurvāntikam pañcāṅgam aparāntikam sadubhayan abhisamasya saptāṅgam / (ADV. pp.1¹³⁻²²)

この中、苦諦は〔煩惱の〕生起を自性とするからただ一種である。…生等…五取蘊が〔苦である〕。または、前際の五支と後際の〔二支〕とのこれ等二つをまとめて七支が〔苦となる〕。（『デ研』 pp.239-240）

これは、十二支縁起との纏めである。そもそもの定義からして、「四真理の教え」をばらばらにする無漏〔法〕は不成立ではあるまいか。

3. 「道の真理の教え」と一切智者

kiṃ sarvabuddhān athaikam / lakṣaṇataḥ sarvabuddhān / mārgasyāvilakṣaṇatvāt / (Akbh.p.216¹⁷⁻¹⁸)
一仏に〔帰依〕するように、すべての仏にそうなのか。全ての仏の特徴として道に違う特徴がないから〔すべての仏に帰依する〕。

これは、「道の真理の教え」がほとんど仏と同格になっている。

ADV では、

(138) 有漏・無漏 [法] ということ (飯 岡)

tebhyo 'pi nirāvaraṇaṃ jñānaṃ pradhānaṃ sarvajña itī... (ADV.p.125¹⁰)

これらのことから障げのない最勝な智慧を「成じた方が」一切智者であると…(『デ研』p.429)

この一切智者は、

naiva ca vyaṃ sarvatra jñānaṃ mukhībhāvād buddhaṃ sarvajñaṃ ācakṣmahe /

kiṃ tarhi /

sāmarthyāt / yā hy asau buddhākhyā saṃtatis tasyā idam asti sāmarthyam yad ābhoga-mā-treṇāviparītaṃ jñānaṃ utpadyate yatreṣāṃ /

āha cātra /

santānena samarthatvād yathāgniḥ sarvabhūṃ mataḥ

tathā sarvavid eṣṭavyo na sakṛtsarvavedanāt_E / (Akḥ.p.467¹⁵⁻¹⁹)

「我々は、あらゆる所に智を現実に現すから、ブッダを一切智者というものではないのである。」

(対論者)「どうということか。」

(論者)「能力があるからである。あのブッダといわれる連続状態のものには、注意するだけで望む所に真実の智を生み出す能力がある。

ここに言う。

炎がありとあらゆるものを食い尽くすように、連続状態による能力の故に、一時にではなく一切を知る故に、一切智者と認められる。

「望む所に真実の智を生み出す能力」とは、衆生への眼差しを思わせる。

4. 無垢と無漏

さて、それでは、もう一方の定義、無垢を見よう。

āmaleti anāsrava / (Akḥ.p.2⁴)

無漏は、無垢である。

これは、聖人 (buddha, arhat 等) で無い人 (prthagjana) にとって問題だからである。どう問題かといえば、何よりも mala (kleśa 心の垢) は、無漏によって断ぜられるといわれるからである。

anāsraveṇa hīyante kleśāḥ // 8-21b // (Akḥ.p.447¹¹)

諸煩惱は、無漏によって断ぜられる。

5. 聖人の位

聖人の阿羅漢にいたるまでには、預流、一來、不還と変化しなければならない。まず、預流は、

phalānām ādyaṃ srotāpattiphalaṃ sarvaphalaprapṛtau tasya prathamatvāt / (Akbh.p.447¹¹)

[聖人たる] 果の初めは、預流果である。すべての果に届くそれが一番目であることから。

kathamac ca dvitīyam / sakṛdāgāmiphalaṃ / ... kāmād viraktāḥ ūrdhvaṃ vā tṛtīyapratipannakau // 6-30c // (Akbh.p.354³⁻⁵)

二番目の瞑想の境地の果はどんなものか。一來果である。…欲界から欲を離れ、あるいは、その上の界 [の境地] では第三果 (不還果) を得る。

阿羅漢については、

arhant anāgāmī pravāhayuktam anāsravaṃ caturthaṃ dhyānaṃ samāpadyate / tasmād vyutthāya pravāhayuktam tad eva sāsravaṃ samāpadyate punaś cānāsravaṃ / (Akbh.p.362¹²⁻¹⁴)

阿羅漢あるいは、不還果は、連続状態 (pravāha) に相応しく、無漏の第四定の瞑想に入る。そこから、出定し、連続状態に相応しく、有漏の瞑想に入る。さらに、無漏の [瞑想に入る]。

有漏と無漏を出入りしている。つまり、行きつ戻りつを繰り返すのだ。

6. 瞑想の乱れ

有漏と無漏を出たり入ったりする瞑想を乱れた (vyavakiraṇa) と言っている。

evaṃ sāsravasya kṣaṇasyānāsravābhyāṃ miśraṇāt vyavakiraṇaṃ niṣpannaṃ bhavati vaibhāṣikāḥ / (Akbh.p.362¹⁶⁻¹⁷)

「このように有漏 [の瞑想] の瞬間が、無漏 [の瞑想] のと混ざるから、乱れるのが成り立つ」と毘婆沙師たちは、言う。

『アビダルマディーパ』にもある。

tadā prathamāḥ sāsravāḥ tṛtīyam anāsravaṃ dhyānaṃ samāpadyate tasmāt sāsravaṃ ākāśānantyāyatanam tasmād anāsravākiñcanyāyatanam evaṃ punaḥ pratilomam / tadā visabhāgatṛtīya dravyagamanād abhiniṣpannā bhavati / ativiprakṛṣṭatvān caturtha samāpadyate tāṃ ca triṣu dvīpeṣu samāpadyate // (ADV.p.420)

しかして最初の諸の有漏 [定] が [あり、そこから] 第三の無漏定に入定し、[無漏定] から有漏の空無辺処に [入定し]、この [有漏の空無辺処から無漏の無所有処に [入定する]。同様にまた逆に [入定する] とき、異類の (visabhāga) 第三の実有の [無漏定] に行くこと (dravyagamana) により成就される (abhiniṣpanna)。非常に遠い (ativiprakṛṣṭatva) から第四 [定] には入定しない。三州 (dvīpa) において入定する。

なぜこのようなことが起こるのだろうか。しかも優れたものは、劣ったものの原因ではないと言うのに。

sarvaṃ ca viśiṣṭaṃ nyūnasya na hetuḥ / (Akbh.p.88⁷)

(140) 有漏・無漏〔法〕ということ（飯 岡）

すべて優れたもの（anāsrava）は、また、劣ったもの（āsrava）の原因ではない。

それ（聖人）ではない人が、聖人に近づくためには、無漏の有漏化が必要となってくる。それが乱れであろう。

7. まとめ

『俱舍論』は、「無漏の五蘊」を説いて、定義に失敗したかに見える。優れたものが、劣ったものの原因になったりしてもいる。しかし、無漏が有漏化するからこそ、それ（聖人）ではない人が、聖人に近づくのではあるまいか。

〈略号及び参考文献〉

Akbh: *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*. Ed. P. Pradhan. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.

ADV: *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāṛtti*. Ed. Padmanabh S. Jaini. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1977.

『デ研』: 三友健容『アビダルマディーパの研究』平楽寺書店, 2007.

〈キーワード〉 無漏, 有漏, 道の真理の教え, 阿羅漢, 聖人でない人

(東京大学大学院修了)

新刊紹介

西村 実則 著

増補 アビダルマ教学 俱舍論の煩悩論

A5 判・524 頁・本体価格 12,000 円
法藏館・2013 年 8 月